

板木は語る

—『伊勢物語』 宝暦六年十月刊本をめぐって—

関口 一美

一、はじめに

鉄心齋文庫には、「寶暦六丙子年初冬吉辰」^(注1)の刊記をもつ伊勢物語の板木が所蔵されており、鉄心齋文庫伊勢物語文華館で行われた平成十一年春と平成十九年春の展示で展観されている。『鉄心齋文庫所蔵伊勢物語図録・十六』には、「五枚。縦二一糶、横八七糶前後。厚みは一定せず、重さも三・〇キロから一・八キロとさまざまである。表面と裏面にそれぞれ四面(二丁)ずつが彫られており、五枚あわせて、刊記や扉絵を含む合計四〇面(二〇丁)分が現存する。」^(注2)と紹介されている。

図録解説でも一部触れられているように、この版は実に複雑な変遷をたどっており、同版でありながら刊記の一部や版心柱刻などが次々と入木補刻されている。幸いそれぞれの段階で刷

られた版本が現存しており、その調査だけでも、板木がたどった道筋をある程度推察することはできた。しかし、今回この板木を詳査することによって、板木の痕跡から版本調査の結果を裏付けることができたので、ここに簡単に報告させていただく。

二、板木の内容

この現存する五枚の板木、表裏二丁が二〇丁四〇面分に何が彫られているのだろうか。整理してみると、意外にまとまった内容であることがわかった。

概略を記すと、まず絵扉と口絵からなる一丁、次に初段から四八段の本文(途中に見開きの挿絵三図と半葉の挿絵二図を含

む)が連続してあり、さらに最終丁となる百二十一段の途中か

ら百二十五段最後まで本文と「近代以狩使事云々」の奥書および刊記、それから包む袋のようなものと題簽二枚、以上である。嵯峨本以来、注釈書以外の伊勢物語の版本は、ほとんど、四八段までを上冊(この版本では同義で上巻と表示)、四九段から百二十五段までを下冊(下巻)として刊行されている。つまり、この現存する板木に上巻分すべてと、刊記を含む下巻末の部分が彫られていることになる。

では、五枚の板木を章段順に並べて、もう少し詳しく見てゆきたい。

一枚の板木に四丁分が彫られているのだが、その四丁の続き方は必ずしも一定していない。そこで、まず、一枚の板木の中で最も早い章段が彫られている一丁の位置を確認し、そこが表の右側になるように板木を置く。次にその部分に続く、その板木の中の第二丁がどの位置にあるかを見る。同様に第三丁、第四丁の彫られている位置を確認する。五枚の板木をすべてこのようにして確認し、章段順に並べて、まず板木に1から5の番号を付けた後、同一の板木の中にある各丁にも、章段順に1から4の枝番を付ける。すると次のようになっていた。(ここでは便宜上、表右の真裏にある場合を「裏右」とし、段数は本

文を指す。丁付はノドにあるがまま記す。)

1—1 表右 絵扉「伊勢物語上の巻」と口絵

1—2 裏左 初段から四段途中まで。丁付「上一」

1—3 裏右 四段続きから五段途中、「春日の里」挿絵半葉。

丁付「上一」

1—4 表左 「春日の里」の挿絵半葉、五段続きから六段途中まで。丁付「上一」

2—1 表右 六段の続きから九段途中まで。丁付なし

2—2 裏右 「芥川」と思われる挿絵半葉と九段続き。丁付「上一」

五

2—3 裏左 九段続きから十三段途中まで。丁付「上六」

2—4 表左 十三段続きから十五段途中と、「盃のかげ」と思われる挿絵の半葉。丁付なし

3—1 表右 「盃のかげ」と思われる挿絵半葉と十五段続きから十六段途中。丁付「上八」

3—2 裏右 十六段続きから二十段。丁付なし

3—3 表左 二十一段から二十二段途中。丁付なし

3—4 裏左 二十二段続きから二十四段途中。丁付なし

4—1 表右 「八橋」の挿絵半葉と二十四段続きから二十五

段途中。丁付「上廿二」



図1 板木1表と板木5表 全体の様子

4—2裏右 二十五段続きから三十三段途中。丁付「上廿三」
 4—3裏左 三十三段続きから四十段途中。丁付「上廿四」
 4—4表左 四十段続きから四十一段および「筒井筒」の挿
 絵半葉。丁付「上廿五」

5—1表右 「筒井筒」の挿絵半葉と四十一段続きから
 四十三段途中。丁付「上廿六」

5—2裏左 四十三段続きから四十八段。丁付「上廿七終」

5—3裏右 百二十一一段途中から百二十五段、奥書と刊記。

丁付「下卅四終」

5—4表左 包む袋のようなもの、題簽二枚

上巻末と同一の板木に突然下巻最終丁が彫られていたので、最初は不思議に思ったが、上巻末の板木がたまたま二丁分余っていた為、下巻末をそこに彫り込んだだけかもしれない。当時、板木は非常に貴重なもので、各面を出来るだけ無駄なく使わなければならなかったと考えられる。

なお、一般的に、二丁がけの板木が一枚の板の中で、どのような順序と位置関係で彫られていたかを調査していないが、この板木の場合、表から裏へ続き、また表に戻る場合が多い。ここに現存している部分だけでも三通りの続き方があるが複雑で

ある。また、同一面の二丁も、右二丁分と左一丁分は天地逆に彫られている。

三、板木の形状と埋め木や補刻の痕跡

横長な板木の左右両端と二丁の間になる中央の部分は、五糧幅位樋状に削られている。《図1》板木の左右は、その樋状に削られた外側に二糧ぐらい平らな部分があり、一番外側は五ミリ幅ほど低くなっている。この板木は、現存状態では、反りを抑えるための端食をかませていない。(一番外側の低くなっている部分にかませてあったのだろうか。)そして、中央や左右の樋状の部分はかなり低く彫られているが、薬研彫(彫刻断面が台形になる彫り方)の挿絵や文字面、匡郭は地の部分とあまり高低差がなく、匡郭は「欠ける」というより、何かが当たった際にへこんだり、木目の関係でささくれたりすることのほうが多そうである。天地逆に彫られている同一面の二丁は、それぞれ板木の下に寄せた感じで彫られており、上部にいくらか余裕がある。また、この板木は反転系凸版なので、板木の中央から外側に(逆さまにならずに見ている部分は左から右に)向かって、反転文字で彫られた文章がすすんでゆく。そして、挿絵も

本文と同じ丁にあるが、見開きになる挿絵は、半葉分ずつ、時には別の板に彫られており、板木から見開きの一図をそれと認識して探し出すのはなかなか難しい。

この板木には、絵扉等を除くすべての丁の版心に丁付を削った跡があり、各丁裏、匡郭の外側に巻表示と丁付を入木補刻してある。埋め木が抜けてしまっているところ(二、板木の内容で「丁付なし」と記載)があり、その四角い穴の深さに驚いた。縦二糧ぐらいの小さい埋め木でも、深さ5ミリ以上のきちんとした四角い穴があけてある。入木補刻するには、それなりのスペースをとってきちんと埋め木しなければならないようである。

本文と入り組んでいる行間のふりがなや句読点濁点を、それだけ削ることはできても、追加することは技術的に困難、というか却って手間がかかるのではないだろうか。部分訂正であれば、本文ごと四角く切り取って埋め木し、本文を覆刻すると同時に、追加するふりがな等を一緒に彫りこむ方が良さそうな気がする。全巻に傍注やふりがなを入れるのならば、覆刻をもとにして新刻した方が早いように思われる。

以上のようなことを考慮すると、一般的に本文文字面が酷似している版本で、傍注なしのものと傍注入りのものがあり、傍

注入り本が後に成立している場合は、入木補刻による修^(注3)ではなく全体が覆刻をもとにした新刻である可能性が高いと考えられる。板木が現存しない版本を調査する際にも、この板木が教えられてきたことは大変参考になる。

刊記の部分では、二か所入木補刻されている。《図2》

まず一つは、「畫工」とあるところも含めて「文花堂／西川右京祐信（印）／京六角通柳馬場西入町／平野屋茂兵衛」の四行分を大きくまとめて入木補刻している。《図3》の初印本刊記と比較）後述するように、この宝曆六年刊本には、画工名が「月岡丹下」のものと「西川右京祐信」のものがあり、筆者は以前から、これらは同版で「祐信」になっている版本のほう^(注3)が後印（後刷り）であると考えていた。しかし、初めてガラス越しにこの板木を拝見した時は、「西川右京祐信」のまわりに埋め木の跡がないので驚いた。後日詳しく調査して、その外側に四行分を囲む埋め木の跡を発見でき、「祐信」になっている版本のほう^(注3)が、刊記のみを彫り直した後印であることを確認できた。埋め木した部分とその周りの部分との境は、印刷の際の墨がしみ込んで、わかりにくくなっている場合もある。

もう一か所は書肆名で「與左衛門」の部分を入木補刻している。印刷された版本では、どれも「與」の字が大きめにその上

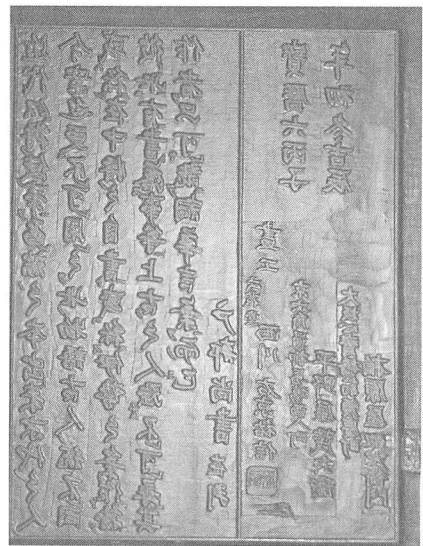


図2 板木の刊記

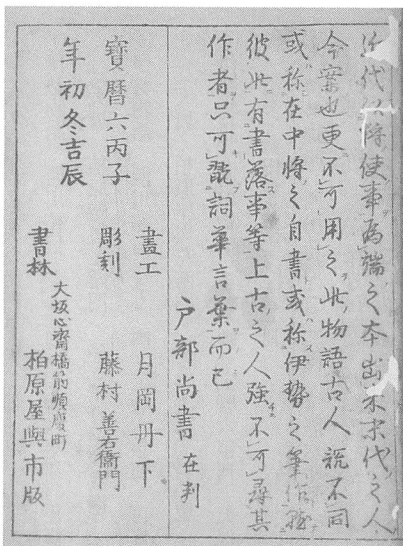


図3 版本①の刊記

の「柏原屋」と同じ感じが出ていますので、「左衛門」の部分だけ入れ替えた可能性も考えられたが、板木を見ると、ここでも入り組んだ形の入木は避けて四角くきちんと切り取ってあった。「與」の字の右角に小さい穴があいており、「與左衛門」の周りに四角い埋め木の跡がはっきりわかる。

四、この板木で刷られたと思われる伝本

この板木で刷られたと思われる『伊勢物語』宝暦六年（一七五六）十月刊本」の伝本は比較的多い。現在までに調査した版本を整理したところ、少なくとも次の七種の刷りを確認できた。早印本から順に記して、板木がたどった道筋を追ってみたい。②以降は変更があった部分に焦点をあてて説明を試みることにする。^(注4)

① 繪入伊勢物語 月岡丹下画 宝暦六年刊

(大坂 柏原屋與市) 大二冊

② 繪入伊勢物語 月岡丹下画 宝暦六年刊 後印

(大坂 柏原屋與左衛門) 大二冊

③ 繪入伊勢物語 月岡丹下画 宝暦六年刊 後修

(大坂 柏原屋與左衛門) 大二冊

④ 伊勢物語 西川祐信(?) 画 宝暦六年刊 後修・後印

(大坂 柏原屋與左衛門・京 平野屋茂兵衛) 大二冊

⑤ 伊勢物語 西川祐信(?) 画 宝暦六年刊 再修

(大坂 柏原屋與左衛門・京 平野屋茂兵衛) 大二冊

⑥ 伊勢物語 西川祐信(?) 画 宝暦六年刊 天保十五年修

(京 數田新兵衛) 大二冊

⑦ 繪入伊勢物語 西川祐信(?) 画 宝暦六年刊〔天保十五年

以降〕修 (京 林芳兵衛) 大二冊

①の原題簽は子持梓で「入伊勢物語上(下)」とあり、中央に添付してある。上下巻とも絵屏があり、その中央に「伊勢物語上之卷(下之卷)」^(注5)、周りに上巻では松と梅の絵、下巻ではもみじと菊の絵がある。絵屏の裏は口絵(画工名なし)で、板木に残る絵屏と口絵および題簽は、これと同一と思われる。(寸法も一致)

次の丁(上一)は初行二行分を使って「伊勢物語上(下)」と伊勢物語の版本としては珍しく内題を入れ、三行目から本文が始まる。四周单边無界(本文巻頭の匡郭縦21・7×横15・6cm)、每半葉十三行で、句読点・濁点・段番号・歌集名があり、

振り仮名はあるが傍注はない。版心は白口（白地）で魚尾はなく、柱刻「上（下）、（丁付）」がある。丁付は本文巻頭より「上一（廿七終）」「下一（卅四終）」だが、上下巻とも「十ノ廿」の飛丁（ちりょう注5）があるため、実際の紙数は、各冊に絵扉と口絵からなる一丁を加えて、上が十八丁、下が二十五丁である。

浮世絵風の挿絵は十一図あり、うち七図は見開きになっている。構図にも取り上げる場面にも、江戸中期まで伊勢物語の整版本に絶対的な影響を与えてきた「嵯峨本の挿絵」からの脱却が見られる。この版本の挿絵は、刊記によれば月岡丹下の絵ということであるが、後印になると西川祐信に画工名がかわってしまう。

絵が入っている場所は本文とは一致せず、絵の順序が本文の章段順になっていないところさえあるため、どの場面の絵なのか解りにくいものもある。特に下巻では、嵯峨本にない場面の絵が目立ち、四十四段「あがたへゆく人」の絵は、本来ならば上巻にあるべきだが、下巻の五十八段本文中に見開きで入っている。また、六十五段「笛を吹く男」の絵と六十三段「馬の口をとりて」の絵も、あえて嵯峨本にない場面を採り上げて見開きで描いているが、六十五段の絵が先行する形で両者とも別の段の本文中に挿入されている。

伊勢物語の整版本において、本文章段の進み具合と挿絵の場面が多少ずれるのは、寛文の、まだ嵯峨本の影響が大きい挿絵の頃から当たり前になっており、また、絵の場面が物語の章段順になっていない場合も江戸後期には間々見られる。そして、この「宝暦六年刊本」ではさらに進んで、挿絵は単に特定の章段の物語の内容を表すのではなく、物語本文から自立しようとしていているという。山本登朗氏は「絵で見る『伊勢物語』」において、この挿絵の「物語本文からの自立」を、具体的に指摘しておられる。（注7）

下巻末（終丁裏）には、「近代以狩使事云々」の奥書（藤原定家の武田本の奥書の途中以降で、伊勢物語整版本の多くに襲用されている）があり、その後に刊記「寶暦六丙子／年初冬吉辰 畫工 月岡丹下／彫刻 藤村 善右衛門／書林 大坂心齋 橋筋順慶町／柏原屋與市版」《図3》がある。

②は、刊記の書肆名を「柏原屋與左衛門」と変えた以外全て①と同じ（同版で部分的補刻もない）である。「與市版」の部分を削り、「與左衛門」と入木補刻している。

『日本古典籍書誌学辞典』（注8）によれば、「柏原屋与一・柏原屋与左衛門は（柏原屋清右衛門の筆者註）分家ですぐ近くにあつ

た。(中略)宝暦七年(一七五七)に正常(注9)が没するが、後嗣がなかったために、翌八年に弟の柏原与一(有常)が宗家の柏原屋清右衛門家に入って家督を継ぎ、明和二年(一七六五)には有常の娘婿方常(二代与一)がその後を継いだ。有常はその後柏原屋与左衛門として出版を続けている。」とのことである。つまり、①の與市と②の與左衛門は有常という同一人物で、②が刷られたのは明和二年以降と推定される。題簽は①と同版で中央に貼付されている。

③は、②と同一刊記でありながら、版心上の匡郭を切り柱刻を削って、代りに各丁裏のノド(板木では匡郭外側に接する位置に確認できる)に「上(下)、(丁付)」を入木補刻している。

この丁付にも、もとの版心丁付同様に飛丁があり、丁付・紙数は①②と同じ。実質紙数とあう丁付をノドにつけるのならば意味がわかるが、そうではないので、この補刻の理由も不明である。ノドの部分は綴じ込まれていて見にくいが、現存する板木では埋め木が抜けてしまって「丁付なし」になっていた部分も、この刷りの段階では全ての丁に丁付がある。また、題簽は①②と同版で中央に貼付されている。他は②と変わらず(同版で部分的補刻もない)。ただし、下五丁裏匡郭上辺と下二三丁裏

二四丁表の「馬の口をとりて」の絵匡郭二か所などが新たに欠損している。

④は、刊記の画工名が「西川右京祐信」に変わる。挿絵そのものは③と同版であり、刊記のみ彫り直したことは板木の調査でも明らかである。なぜ、わざわざ画工名を変えたのか解らない。祐信のほうが有名であったからであろうか。丹下がこの宝暦六年刊本の挿絵を描いた背景と、その後刊記が彫り直された背景を、④の印年推定とともに考えてみたい。

月岡丹下(雪鼎)は、従来、宝永七年(一七一〇)近江国日野に生まれ、同郷の画家高田敬輔に学んだが、不遇の時期が長く、宝暦初年頃、新天地を大阪に求め心齋橋に移住して、宝暦三年、四十四歳で最初の版本『絵本龍田山』を出した、と考えられていた。(注10)

近年、山本ゆかり氏は、仁和寺の寺務記録『御室御記』に新たに見出された雪鼎の法橋、法眼の叙任記録から、伝記・基準作の再検討をされた。『御室御記』に依拠すれば、月岡丹下(雪鼎)は享保十一年(一七二六)生まれとなり、宝暦三年、従来考えられていたよりも十六歳も若い二十八歳で最初の版本を出し、宝暦六年に三十一歳で、この板木で刷られた『繪入伊勢物語』

を出したことになる。この頃の丹下の絵本や挿絵本は、古典や和歌を対象とするものや女性向け教養書が多く、扱う領域としても祐信の絵本制作の基本と重なり、その絵は祐信風を継承する。また、このころ、丹下の版本は版元との共同制作であり、版元からも、祐信亡き後の需要を満たすため、祐信風の絵を求められたと考えられる。^(注11)

一九九四年に行われた五島美術館の『伊勢物語の世界』^(注12) 展覧会図録では、③および④と思われる二点の版本の、挿絵と刊記部分の写真を掲載し、「両本とも、奥書の下の部分以外は全く同一の版。絵は月岡丹下が描いたもので、名前の知れていた、京都の浮世絵師、西川祐信（一六七一一一七五〇）の名を使って販売拡張を狙ったものかと推定できる。先に丹下の名で刷り、売れ行きが悪く祐信としたか、先に祐信としたが、やはり本人にしようとする丹下に変えたかは不明。」^(注13)と解説されている。

以上の事柄をふまえて、今、この版本の系譜と印面の欠損や板本を調査した結果をあわせると、次のように考えられる。

宝暦六年の初印から③までは、祐信風の絵であっても、描いた本人である丹下の名を刊記に入れていた。そして時代が下り、この④の刷りになって初めて祐信の名を使った。祐信は寛延三年（一七五〇）に八十歳で没し、丹下は天明六年（一七八六）

に六十一歳で没している。^(注13) ④の年記は初印本と変わらず、印年の記載がないので断定はできないが、画工名を祐信に変えたのは、少なくとも丹下没後の可能性が高い。初印の宝暦六年（一七五六、この時すでに祐信は生存していない）から丹下が没する天明六年（一七八六）まで三十年、そして、その後さらに五十八年もの歳月が流れて、⑥の天保十五年（一八四四）印となる。丹下が若い新進の画工であったから名前を変えたのではなく、祐信も丹下も故人となって日がたったころに、名前を入れ替えたのではないだろうか。

④の刊記では、「畫工」とあるところも含めてその下の四行分「文花堂／西川右京祐信（印）／京六角通柳馬場西入町／平野屋茂兵衛」が入木補刻されている。京の書肆、平野屋茂兵衛の名前を入れると同時に画工名も祐信に彫り直されている点、天保十五年以降は、後述の奥付にあるように、京の書肆に求板されてゆく点にも注意したい。丹下は「京の祐信に対する大坂浮世絵の巨匠」^(注14)と評されているように、京での需要はやはり祐信の挿絵だった。京の書肆にとつては、丹下の絵であるよりも祐信の絵であってほしかったのである。そこで、もう（初印から最低三十年、場合によっては五十年位たったいたかもしれない）後印本であるので、京で売るのが都合が良いように名前

を入れ替えてしまったのではないかと推測できる。しかし、販売拡張を狙ったと思われる割には、④以降の刷りの伝本は、それ以前のものに比べて非常に少ない。

また、④から題簽が変わり、普通の子持枠ではなく、内側が竹節のような線に囲まれた飾り枠で、上の方に松と竹、下の方に花が描かれ、「伊勢物語 上(下)」とだけある。中央貼付。

この題簽は現存する板木には見当たらない。他(絵扉、口絵、挿絵・柱刻含む本文、奥書部分)は③と変わらず。ただし、ノドの丁付の欠落が目立つようになる。

⑤は、上下巻に共通の色刷りの絵扉を付与している。これは①～④の絵扉とは全く異なり、現存する板木には見当たらない。その裏の口絵も色刷りで、これも①～④の口絵と構図は似ているが別版である。上巻に「菱川師宣古圖／翠松園珍藏／五代目菱川清春模写」下巻に「薰泉斎清春筆」翠松園珍藏と入っている。版心を含め、本文部分は③④と変わらず、題簽も④と同一である。ただし、上巻の丁付「七」が新たになくなる。

⑥では、上巻で⑤と同一の色刷りの絵扉と口絵を入れているが、下巻では見返しの位置に⑤の下巻の色刷り口絵が貼ってあ

り、絵扉はない。本文部分は③以降変わらず、下巻末に④⑤と同じ奥書・刊記を残して、裏表紙見返しに奥付「天保十五年甲辰冬求版／平安書肆 六角通富小路角／藪田新兵衛」がある。題簽は④⑤と変わらない。ただし、上八丁表「盟のかけ」の絵 匡郭左上角、上二六丁表「筒井筒」の絵 匡郭左右上の角、上二七丁表 匡郭上辺などに新たな欠損が見られる。

⑦には、色刷り絵扉は上下巻ともなく、見返しに⑤と同版だが多少色が異なる(上巻で畳の部分色を抜く等) 色刷りの口絵が貼ってある。そして、その次に①～④と同版(板木と同一)の絵扉と口絵がある。③以降変わらない本文に続き、④⑤⑥と同じ奥書・刊記があり、裏表紙見返しの奥付は「京都書林 二條通堺町西入町／林 芳兵衛」となっている。ここで題簽がまた変わり、板木に彫られている題簽と同一の子持枠「繪伊勢物語 上(下)」に戻る。匡郭の欠損箇所、板木とこの刷りにのみに見られるところ、たとえば、上八丁表「盟のかけ」の絵 匡郭上辺(桜の花びらのところ)などがあるため、一連の調査本の中では、最も後印(後刷り)と考えられる。⑥までの項に述べてきた欠損箇所も、この版本と板木にすべて受け継がれている。

池田亀鑑氏がこの本に添付した覚書には、「『書賈集覽』に林芳兵衛は「文泉堂 弘化―現代」トアリ」と記されている。

なお、宝暦六年の刊記を持つ伊勢物語の版本に、内容的にも全く異なる別版が他に二つある。その一つは「延享四年刊宝暦六年求板 西川祐信画」で、もう一つは「宝暦五年刊宝暦六年 月岡丹下画」である。ともに「宝暦六年」の年記しかない刷りもあり、画工名も絡んで混乱しやすい。『国書総目録』（補訂版、岩波書店、一九八九年）や『古典籍総合目録・国書総目録続編』（国文学研究資料館編、岩波書店、一九九〇年）、また『日本古典籍総合目録』（国文学研究資料館編）やNII（国立情報学研究所）の総合目録を検索した場合など、「伊勢物語、宝暦六版（一七五六）」の中には、ここでとりあげた「宝暦六年十月刊本」と、他の二つの版本の宝暦六年の刷りが混在しているのに注意が必要である。

五、おわりに

以上、鉄心齋文庫に現存する板本と、それによって刷られたと思われる伝本とを比較しながら見てきた。

整版本は、板木があれば、何回でも時代を経て同じものを刷ることができると言える。しかしそこには、自然の磨滅や損傷、人為的な補刻の跡も刻まれていく。絵屏や口絵を新刻してつける場合もある。この宝暦六年刊本の場合、途中で新しい色刷りの口絵と絵屏が使われたが、本文と同一の板木に彫られていた最初の絵屏と口絵は、削りとられることなくそのまま伝えられ、年月を経て再び使われるようになった。

板木が磨滅して刷りが悪くても、それこそ、その板木が長い間使われてきた証であり、版元を渡り歩きながらも板木が残るということは、その版本が読者に受け入れられ続けた証でもある。

板木は、さまざまな版本の歴史を隠さずに語っている。今回、板木と伝本を同時に調査することによって、宝暦六年刊本の七種の刷りが、柱刻の有無や刊記・画工名の異同にかかわらず、すべて同版であることを確認し、さらに刷りの順序についても再確認することができた。七種の刷りは、とりもなおさず、この同じ一枚の板木から生まれた版本なのである。もし、江戸初期の伊勢物語の板木が現存していれば、伝本から推定される数々の興味深い事実を実証できるのに残念である。

末筆ながら、貴重な板木や版本の調査および写真掲載をお許

し下さった鉄心斎文庫・芹澤美佐子氏をはじめ、関係諸機関の御厚意と、本稿の執筆をお勧め下さり、ご指導下さった山本登朗関西大学教授に、心より御礼申し上げます。

注

(1) 引用部分の文字については、板木や原本の様子を伝えたいため、できるだけその通りの表記にした。以下同じ。

(2) 『鉄心斎文庫所蔵伊勢物語図録』第十六集「伊勢物語版本の世界」鉄心斎文庫伊勢物語文華館、平成十一年四月、第三十五図。

(3) 本稿では、「修」という用語を、「本文および挿絵、前付、後付について、その大部分に初印と同一の板木を用いているが、部分的に入木補刻、または一部の丁を増補したり削除したりした場合」に使用した。刊記のみの入木補刻や奥付をつけただけの場合は「修」とはせず、「印（刷り）」として扱う。

(4) 「刊（版）・印（刷り）・修（補訂）」にかかわる版本書誌学の原則は、長澤規矩也、阿部隆一両氏に従うが、用語については、「刊」と同義で「版」を、「印」と同義で「刷り」を適宜用いた。また、書誌記述に際しては、この版の

各刷りの識別と一般的なわかりやすさを優先した。本章での書名は識別のため、原題簽外題とし、修年不明だが、同時ではない二段階の修のうち、第一段階のものを「後修」、第二段階のものを「再修」の語を用いて区別した。原本に記載なく筆者の推定による部分は〔 〕で囲んだ。書肆名とその所在を記し、書型は「大本（美濃本）」を「大」と略記した。なお、本文中、題簽は板木との関連から採り上げたが、表紙と題簽の紙（紅色の場合と白色の場合とがあるように見受けられたが、色素が抜けて白く見えるものも有）、料紙（多少厚さに違いがあるもの）、すべて楮紙）についてはここでは触れなかった。

本稿で扱った伝本の所在を、筆者が実査したもののみ、略号と請求記号（ただし分冊部分は省略）で記す。

〔略号〕

鉄 Ⅱ 鉄心斎文庫（版本番号）

東大 Ⅱ 東京大学総合図書館

早大 Ⅱ 早稲田大学総合図書館

関大 Ⅱ 関西大学総合図書館

松蔭 Ⅱ 神戸松蔭女子学院大学図書館

同女田 同志社女子大学京田辺図書館

国会 国立国会図書館

特 都立中央図書館特別買上文庫

加賀 都立中央図書館加賀文庫

岩瀬 西尾市立図書館岩瀬文庫

国文研 国文学研究資料館

日文研 国際日本文化研究センター

民博 国立民族学博物館

①個人蔵 Y 他に、鉄105・鉄106・鉄188・鉄236・

東大E23/374・東大E23/357（上巻の扉欠）・早大へ
12/1116・早大く12/2865・国会京乙289・国文研サ44・

日文研KG/52/Ts

②関大913/32/19 他に、鉄103・鉄104・鉄107・同女

田913/32/T9576・加賀3033（題簽左肩貼付）・民博

AB00/913.32/イセモ・松蔭913・32/31

③鉄102 他に、特298（絵扉・口絵の一丁欠葉か）・特

209・岩瀬67/56・松蔭913・32/29

*ノドの丁付の一部を欠き、刷りの時期が異なると考えられるものも、他の条件が一致する場合はここに含めた。

④鉄168

⑤特300

⑥鉄136

⑦特301

(5) この版本の飛丁は、十丁目に「十ノ廿」という丁付がしてあり、その次の実質十一丁目に「廿一」と丁付してある。伊勢物語の版本ではこのような飛丁が江戸中期以降非常に多く、実質紙数と終丁丁付の数字は全く一致しない。そのほとんどは意味なく単なる水増しと思われるが、まれに「修」に起因する飛丁（たとえば挿絵を減らした場合など）がみられる。

(6) 挿絵の名称で、「一」の絵、と記したものは、『伊勢物語絵巻絵本大成』（角川学芸出版、平成十九年）研究編二三四―二三八頁の「諸本場面对照表」による。

「あがたへゆく人」の絵に関しては、絵師は「ものこしにゆひつけさす」の本文を意識して描いたと思われるが、版本の製作者が六十段「花橘」の絵または六十二段「いにしへのほひ」の絵と勘違いして下巻に入れてしまった可能性もある。

(7) 山本登朗氏「絵で見る『伊勢物語』」(『日本文学と美術

—光華女子大学公開講座—) 和泉書院、二〇〇一年)

(8) 長島弘明氏執筆「柏原屋清右衛門」の項(『日本古典籍
書誌学辞典』岩波書店、一九九九年)

(9) 柏原屋清右衛門家当主は、享保九年(一七二四)の時点

では房常。その次が政方、さらにその次が正常である。(前

掲注8『日本古典籍書誌学辞典』同項による。)

(10) 従来 of 生年説に基づく丹下については、田中達也氏「月

岡雪鼎とその門葉」(『肉筆浮世絵 第九巻 祐信雪鼎』集

英社、昭和五十七年)を参照した。

(11) 次の論文および発表を参考にした。

① 山本ゆかり氏「月岡雪鼎試論—古典をめぐる絵画制作の
再検討—」(『美術史』一五五、平成十五年十月)

② 山本ゆかり氏口頭発表「月岡雪鼎と絵本—西川祐信から
の継承と離脱」国際絵本シンポジウム(平成二十年、

於国文学研究資料館)

(12) 『伊勢物語の世界』(『展覧会図録』五島美術館、一九九四
年、一六〇頁)

(13) 前掲注11①山本ゆかり氏論文、一七一頁「月岡雪鼎略年

譜」

(14) 『新潮日本人名事典』一九九一年

図版

《1》板木1表と板木5表 全体の様子(ただし、板木5は調
査時とは天地が逆に置かれている。)

《2》板木の刊記(匡郭寸法 約縦21・6×横15・8 cm)

《3》版本①の刊記(匡郭寸法 縦21・6×横15・8 cm)

(せきぐち ひとみ/本学科目等履修生)